Osaka University Knowledge Archive

Title	日本語小説英訳の際の時制の問題を考える : 物語文における「タ」型、「ル」型の混在をどのように説明すべきか
Author(s)	小倉, 慶郎
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2008, 6, p. 35-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8770
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

日本語小説英訳の際の時制の問題を考える
—物語文における「タ」形、「ル」形の混在をどのように説明すべきか—

小倉　慶郎

【要旨】

日本語の物語文には、一見現在形と過去形が混在しているようにみえる箇所が少なからずある。日本人には何の問題もないことだが、日→英翻訳の授業中、留学生から「これはなぜなのか。英語のhistoric presentと同じなのか」と質問を受けたことがある。英語では、過去に起きたことは過去時制で表すのが原則であり、historic presentという特例を除けば、物語文中の現在形・過去形の混在はありえない。なぜこのような現象が日本語には頻繁に起きるのだろう。またこの「タ」形と「ル」形の混在は、historic presentと同一視していいのだろうか。そして日本語の時制は一見自由で、英語の時制は固定的であるのはなぜだろう。留学生からの質問を出発点に、対照言語学的なアプローチを用いて、日英両言語におけるこれらの問題を整理する。そして日本語の物語文における「タ」形と「ル」形の混在を、留学生にどのように解説するべきかを考える。

はじめに

筆者は、長い間日本人に対する英語教育に関わってきた。そして、現在も、本センターで留学生への通訳・翻訳授業を担当している以外は、日本人学生に英語を教えることがほとんどである。こうして長い間、英語教師をしていると知らず知らずのうちに、英語優位、日本語下位の発想に侵されている自分に気づく。無意識のうちに、英語の発想が合理的で日本語の発想は非合理だ、と考えるようになるのだ。（筆者には、事実として言語に上位、下位があるとは思えない。もしもそう考えるのであれば、何らかの固定観念に侵されているに違いない。）

たとえば、日本人学習者の英作文を添削していると、現在形と過去形が混在した例に出くわす。

（1）I *go to school at eight this morning and ate lunch at noon.
（2）When I lived with my parents, I always *have eaten dinner with my father, mother, and younger brother.

もちろん、（1）のgoはwentに（2）のhave eatenはateに直さなければならない。このような添削を何度もしていると、英語教師は、「何度言わせたらわかるんだ。英語では、過去のことは過去形で書きなさい、と何度もいったじゃないか」というような小言ばかりをいうようになるものだ。そして、知らぬ間に「時制の概念が曖昧な日本語」という負のイメージが頭の中にできあがってしまうのである。しかし（1）のもとになる日本語を考えてみると、疑問は氷解する。「私は8時に学校へ行き12時に昼食を食べた」。つまり、「行き」だから現在形に訳し、「食べた」だから過去形に訳したのだろう。（2）は、「両親と住んでいたときに、父、母、弟といつも夕食を食べていました」という日本語が浮かぶ。「住んでいた」だから過去形、「食べていました」（「食べてしまった」との混同か）だから完了形を使ったのかと、想像がつく。第二言語習得の用語をつかえば、「母語干渉」、最近の言い方でいえば「負の言

語転移」である。しかし、この言語事実を英語教師として自覚し、客観的に学生に説明できるようになるまでは時間がかかる。正直にいえば、筆者が日本人の英語学習者に対して、「英作文で日本人が時制をよく間違える理由」を冷静に説明できるようになったのは、比較的最近のことである。

さて、この日英の「時制」の相違は、本センターの外国人留学生が不思議に思うことでもある。筆者の日→英翻訳の授業では、日本語の小説文などを題材にしてその英訳を検討する。日本語の物語文には、一見現在形と過去形が混在しているようにみえる箇所が少なからずある。日本人は無意識に、現在形と過去形を混在させているので問題があるとは気づかない。しかし授業中、インドネシア人の留学生から「これはなぜなのか。英語のhistoric present（歴史的現在）と同じなのか」と質問されたことがある。たしかに英語では、過去で起きたことは過去時制で表すのが原則であり、historic presentという特例を除けば、現在形・過去形の混在はありえない。

実例を見ながら考えてみよう。以下は、授業で使用した芥川龍之介『羅生門』の一部である。

(3-a) その代りまた鴉がどこからか、たくさん<u>集って来た</u>。昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鴟尾のまわりを啼きながら、<u>飛びまわっている</u>。ことに門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻をまいたように<u>はっきり見えた</u>。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄みに<u>来るのである</u>。

（本稿では、英語にも日本語にも「時制」（tense）があると仮定して話を進めたい。文尾の「タ」形を過去形、「ル」形を現在形と考え、「タ」形、「ル」形という用語を使用する。金田一（1988：111-116）などで、日本語の「タ」には少なくとも過去というtenseを表す場合と完了というaspectを示す場合があるといわれているが、本稿では「タ」形と「ル」形は時制を表すものと仮定する。）

(3-a) の下線の部分は、過去形→現在形→過去形→現在形となり、英語の物語文では通常ありえない、現在形・過去形の混在が見られることになる。これは、当該文の英訳（Jay Rubinによる）を見るといっそう明らかになる。

(4) Crows, on the other hand, <u>flocked</u> here in great numbers. During the day they would always <u>be cawing and circling</u> the roof's high fish-tail ornaments. And when the sky above the gate turned red after sunset, the crows <u>stood out</u> against it like a scattering of sesame seeds. They <u>came</u> to the upper chamber of the gate to peck the flesh of the dead.

(3-a) の日本語に相当するところに下線を引いた。英語では、過去形→過去形→過去形→過去形と、過去形が連続しているのがわかる。ちなみに、would be cawing and circlingの中のwouldは「過去の習慣・習性」を表し、「よくした～ものだった」という意味である。

このように英語の物語文では、過去で起きたことが連続して現れ、それを過去時制で表すの

が原則である。私の日→英翻訳の授業を受けている留学生で、日本語に引きずられて現在形・過去形が混在する英訳を書いた学生は、過去には一人もいない。私のクラスの多くの受講生の母語は印欧語であり、日本語よりも強固な過去時制をもつためと考えられる。（これは第二言語習得の例ではないが、一種の「正の言語転移」と考えることができるだろう。ただし日本語と極めて似た文法構造を持つ韓国語話者には、日本人学習者と同様なことが起こるようだ。複数の韓国人留学生から聞いた話である。「韓国の友人は英語がよくできるのに英語のエッセイを書くと、ネイティブの英語教師から、なぜ君は現在形・過去形を混在させて書くのか、と注意される」という。韓国人学生も「母語干渉」（負の言語転移）から、英作文の際に日本人学生と同じミスをすることがしばしばあるようだ）。

さて、先ほどのインドネシア人の留学生からの質問――日本語の物語文に現在形と過去形が混在しているように見えるのはなぜか。英語のhistoric present（歴史的現在）と同じなのか―に、私は、次のように答えた。授業の英訳作業中に突然飛んできた質問なので、深く考えずに咄嗟に答えざるを得なかった。

「文尾のタ形、ル形は、一見現在形と過去形の混在のように見えるけれど、英語の概念でいう「時制」とは関係ない。僕は出版翻訳などで飯を食ってきたから、日本語の物書きの端くれだと思っている。その立場から言わせてもらえば、これは文章の調子が単調にならないようにする書き手側の工夫なんだ。現代日本語の欠点を挙げるとすれば、特に物語文で語尾が単調になるということが挙げられる。物語はほとんど過去時制で話が進むが、だからといって、「タ」形ばかり使っていては面白くないだろう。だから書き手は、適度に「タ」形と「ル」形を混在させて、文章にメリハリをもたせるんだ。英語のhistoric presentとは別物と考えていい。」

この即席の説明に、彼は一応納得したような様子だった。しかし、果たしてこの説明でよかったのだろうか？

本稿では、この留学生の質問を出発点として、留学生への適切な解答を探る形で論考を進めることにする。対照言語学的なアプローチを用いて、日英両言語における「時制」の相違、具体的には、英語のhistoric presentと日本語のタ形、ル形の混在効果を比較したい。そして上記の留学生の質問にどのように解説すべきなのかを考えてみたい。

1．タ形、ル形の混在―書き手側の言い分

本節では、日本語の書き手がなぜタ形、ル形を混在させるのか、その理由を考えてみたい。本稿は日本語の実践的な学習に励む留学生への説明を考えることが主目的であるから、まず書き手の立場から考えてみることは適当であろう。以下、三島由紀夫と谷崎潤一郎の『文章読本』から引用する。まず三島の言い分を聞いてみたい。

私はまた途中で文章を読みかえして、過去形の多いところをいくつか現在形になおすことがあります。これは日本語の特権で、現在形のテンスを過去形の連続の間にいきなりはめることで、文章のリズムは自由に変えられるのであります。日本語の動詞がかならず文章のいちばん後ろにくるという性質（倒置法を除く）によって、過去形のテンスが続く場合には

「.....した」「.....た」「.....た」という言葉があまりに連続しやすくなります。そのために適度の現在形の挿入は必要であります。（p.193）

やはり、小説家は文章の調子が単調になるのを嫌う。現代日本語では、どうしても小説、物語文を書く際に文尾の単調さが気になってくる。そのためにある程度恣意的に、現在形（「ル」形）を挿入せざるを得ないという意見である。これは、翻訳の実務に携わってきた私も同意見である。私も、三島と全く同じ理由、つまり単調さを避ける意味で、物語文の翻訳において現在形と過去形を混在させた日本語を好む。

一方谷崎は、『文章読本』の中で、西洋語に存在するような文法や時制の必要性を軽視する発言を繰り返す。言葉を換えれば、書き手の立場にたった意見を述べているといっていいだろう。

.....われわれの国の言葉にもテンスの規則などがないことはありませんけれども、誰も正確には使っていませんし、一々そんなことを気にしていては用が足りません。「した」と云えば過去、「する」といえば現在、「しよう」といえば未来でありますが、その時の都合でいろいろになる。一つの連続した動作を叙するにも、「した」「する」「しよう」を同時に使ったり前後して使ったり、全く規則がないのにも等しい。だがそれでいて実際には何の不便もなく、現在のことか過去のことかはその場その場で自ら判別がつく。（p.74）

これは谷崎の主張である。しかし日本語の現在形・過去形の混在について、特定の言語事実から発生しており、規則性が見られると主張する研究者もいる。たとえば、金田一（1988：116）は、「状態」を表す動詞は、非過去形（＝現在形）にし、現象が「生起」することに関する動詞は、過去形にすることが多い事実を指摘している。三上（1999：219-224）もほぼ同意見である。金田一は、現在形・過去形の混在について以下のように結んでいる。

つまり、日本語のセンテンスで、すべての末尾の動詞を〈過去〉の形にしないのは、それで間違いを起こす心配がないからである。その上、センテンスの終わりの単調さをきらう人にとっては、〈過去〉の形・〈非過去〉の形の混用は、文章に変化を与える効用もある。

筆者はここでは、金田一の「センテンスの終わりの単調さ」を嫌い、文章に変化を与えるために、現在形・過去形を混用するという意見のみを支持したい。実際、既出の芥川の文章の現在形と過去形をそっくり入れ替えても、一般読者はほとんど気がつかないからである。以下、試みに、（3-a）の現在形と過去形をすべて入れ替えてみよう。

（3-b）その代りまた鴉がどこからか、たくさん集って来る。昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鴟尾のまわりを啼きながら、飛びまわっていた。ことに門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻をまいたようにはっきり見える。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄みに来るのだった。

私には、現在形と過去形をそっくり入れ替えても、大きな違いは感じられない。皆さんはい

かがだろうか？もちろん、言葉には適切な用い方があり、一流の文章家はその達人である。どちらがよいかといわれれば、芥川の方がよいということになるだろう。また金田一、三上の指摘の通り、「状態」を表す動詞＝「ル」形、「動作・出来事」を表す動詞＝「タ」形という傾向も、大量のデータを集めれば認められるのかもしれない。そうはいっても、上記の入れ替えは、ほとんど一般読者が気がつかない程度の差異ではないだろうか。本稿は日本語文法を追究することが目的ではないので、考察はここまでに留めたい。だが、少なくとも創作者の立場からは、「ル」形・「タ」形の混在は、現代日本語の文章の単調さを避けるために、ほぼ恣意的に使われると考えて間違いはないだろう。

2．historic presentとの比較

本節では、英語のhistoric presentとはどういうものなのかを見てみたい。historic presentの定義をJespersen（1965：238-239）で確認してみよう。

...the Present tense is used in speaking of the past. This is the so-called 'historic Present' (a better name would be the 'dramatic Present'), which is pretty frequent in connected narrative: the speaker, as it were, forgets all about time and recalls what he is recounting as vividly as if it were now present before his eyes. Very often, this Present alternates with the Preterit.
（現在時制は、過去に言及する時にも用いられる。いわゆる「歴史的現在」だ（「劇的現在」という呼び名の方が適切であろう）。これは、物語文の中でかなり頻繁に起きる。語り手は、いわば時間の観念をすっかり忘れ、いま眼前で起きているかのように生き生きと出来事を描写する。この現在時制は、過去時制と交互に現れることがとても多い。）

定義を見る限りでは、現在時制と過去時制が交替するというところは、「ル」形・「タ」形の混在と似ている。では、次に、実例を検討しよう。以下は、Charles Dickensの*David Copperfield*からの引用である。（現在形のみ＿＿を引いた）

（5）If the funeral had been yesterday, I could not recollect it better. The very air of the best parlour, when I went in at the door, the bright condition of the fire, the shining of the wine in the decanters, the patterns of the glasses and plates, the faint sweet smell of cake, the odour of Miss Murdstone's dress, and our black clothes. Mr. Chillip <u>is</u> in the room, and <u>comes</u> to speak to me.
'And how is Master David?' he <u>says</u>, kindly.
I <u>cannot</u> tell him very well. I <u>give</u> him my hand, which he <u>holds</u> in his. (p.141)

最初は過去時制の連続であったものが、いつのまにか現在形と入れ替わっている。そして現在形と過去形が1センテンスごとに交代するということはなく、数センテンスの現在形がしばらく続く。そして再び過去形の連続に戻るのである。これが、historic presentである。英語のhistoric presentと日本語の「タ」形、「ル」形の混在の違いについては、平田（1990：

66）は次のように述べている。

……いわゆる歴史的現在が、あるひとまりの文章による現在形の叙述で、しかも一篇のクライマックスと言うべき場所に出現するのに対して、日本語においては、現在形と過去形の交代はより小さな範囲で――極端な場合は一文ごとにおこりうる――また、より頻繁におきる……。

ただし、この平田の指摘は、物語文中のhistoric presentの用法に限られる。英語の会話体の中では、日本語ほどではないにしてもhistoric presentは普通に見られ、特にジョークを発する際に頻繁に起きるからだ。（*Longman Grammar of Spoken and Written English*, 1999 :454）

では、ここまで考察したことをまとめよう。物語文中では、日本語のル形、タ形の交替の方がはるかに頻繁に起き、英語のhistoric presentは出現頻度が低い。そしてhistoric presentはいったん出現すると、しばらく現在形が続く。日本語のように現在形・過去形を一文ごとに交替させることはできない。そして使用目的は、historic presentの場合、「叙述を生き生きとさせるため」であるが、日本語の場合は、前述のように第一に「語尾の単調さを解消するため」と思われる。「ル」形、「タ形」の混在にも叙述を生き生きさせる効果があると考えられるが、このことについては次節で考察したい。

3．現在時制と過去時制の混在は叙述を生き生きとさせる効果があるか

サイデンステッカー・安西（1983：69）は、日本語小説中の現在時制と過去時制の混在について以下のように語っている。

作者は、作中の事件を過去の出来事として語っているにもかかわらず、過去を客観的にただ過去のこととして眺めるのではなく、事件のあったその時点に視点を移動し、あたかも今現に目の前で起こっていることであるかのように描写するのだ。

つまり、日本語小説では、タ形とル形の混在により、語り手の目が作中人物の目に重なり、臨場感が高まるというのである。(注)

この効果を確かめるために、（3-a）で引用した『羅生門』の例文の文尾をすべて過去形にして混在効果を消去してみよう。

（3-c）その代りまた鴉がどこからか、たくさん<u>集って来た</u>。昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鴟尾のまわりを啼きながら、<u>飛びまわっていた</u>。ことに門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻をまいたように<u>はっきり見えた</u>。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄みに<u>来るのだった</u>。

いかがだろう？（3-a）の原文と比べると、やや精彩を欠いているように感じるのは筆者だけだろうか。やはり、日本語のタ形・ル形の混在は、英語のhistoric presentと同じ効果を生み

出していると考えるべきであろう。ただし、サイデンステッカー・安西も指摘するとおり、英語のhistoric presentは物語文の中ではやはり「例外的な用法」であって、日本語小説中のように多用されることはない、という違いには注意しなければならない。安藤（1986：185）は、historic presentは修辞的技巧（一種の小説技法）として用いられ、日本語のタ形とル形の混在はあまりにも普通に用いられている、という。

historic presentとタ形・ル形の混在を、用法・頻度、継続性、目的という項目に注目して表にまとめると以下のようになる。

表1　historic presentとタ形・ル形の混在の比較

	用法・頻度	継続性	目　的
historic present	物語文中では、一種の小説技法であり、例外的な用法。ただし会話ではよく使われる。	少なくとも数センテンスは現在形が続くのが普通。	叙述を生き生きとさせるために用いられる。
タ形・ル形の混在	物語文中のみならず、日本語全般で、恣意的に頻繁に用いられる。	一文ごとに現在形と過去形が交替するなど頻繁な交替が起きる。	文尾の単調さを解消するため。また叙述を生き生きとさせる効果もある。

上のように両者の違いをまとめたが、これらは、結局日本と英語に内在する本質的な世界観の違いから生じていると考えられる。その本質的な世界観の違いとは何なのか。日英の時制の違いに言及しながら、次節で考察したい。

4．なぜ日本語の時制は弱く、英語の時制は強固なのか

ここまでの考察で、日本語の時制の概念は弱く、それに比べて英語の時制は固定化された強固なものであるという事実が浮かびあがってきた。

その違いを宗宮（2007）は「英語と日本語の世界観の相違に対応する」という。宗宮は、多くの実例を挙げながら、日本語は現在と過去が一体化された世界であり、英語が表す世界は過去から未来へ直線的に進むダイナミックな世界であると説く。

そのような世界観を想定すれば、多くの疑問が氷解する。時制（tense）という概念自体、西洋由来のものであるから、直線的な時間軸を持つ英語の視点から見れば、英語の時制は強く、日本語は弱いと見えるのは当然であろう。その世界観から派生した物語の語り手の態度は、日本語の場合、主観的であり「触覚型」（板坂 1971）ともいえる。語り手の視点は、作中人物の視点にまで移動するなど、絶えず揺れ動き流動的となるわけだ。一方、直線的な時間概念をもつ英語の場合、語り手は客観的な態度を崩さない。板坂はこれを「視覚型」と呼ぶ。語り手は、ある視点から物語を眺めているが、語り手の視点は固定され、日本語のように自由に動かすことはできないのである。

もしも日本語小説を日本語で読んだ時と、英訳で読んだ時に印象の違いを感じるのならば、日英両語の世界観、語り手の態度・視点の移動の違いが一因になっている可能性はあるだろう。

ここで、上述した日本語と英語の（物語文における）違いをまとめてみる。

表２　日本語と英語の（物語文における）比較

	時間の観念	時制の概念	語り手の態度	語り手の視点
日本語	現在と過去が一体化	弱い	触覚型、主観的	流動的。語り手が作中人物の視点まで移動することもしばしば起こる。
英語	過去から未来へ直線的	強い	視覚型、客観的	固定されている。

５．現在時制と過去時制の混在は日本語に本質的なものか

次に、現在時制と過去時制の混在現象が日本語に本質的なものであるのかどうかを調べることにする。その材料として、「物語の出来はじめの祖」と『源氏物語』の中で言及された『竹取物語』を調査してみたい。日本最古の物語のひとつと考えられる『竹取物語』で現代日本語と同様の現象が見られれば、この現象は、日本語の根幹に関わるものと考えることができるだろう。ただし、現代日本語文法と古典文法では、形態においてかなりの違いが見られる。古典文法には、過去の助動詞「き」「けり」、完了の助動詞「つ」「ぬ」「たり」「り」があるが、これが近代において「タ」ひとつに収束したという（平田 1990：67）。もしもそうであれば、本稿は「タ」を過去時制を表すものと扱っているので、古典文法の「き」「けり」「つ」「ぬ」「たり」「り」もすべて過去時制を表すものと考えることにしたい。以下は『竹取物語』の冒頭である。過去形には____、現在形には_____を引いた。

（6）いまは昔、竹取の翁といふもの有りけり。野山にまじりて、竹を取りつつ、よろづの事に使ひけり。名をば、さかきの造となむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人いと美しうてゐたり。翁いふやう、「我あさごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ、子となり給ふべき人なめり」とて、手にうち入れて家へ持ちて来ぬ。妻の女にあづけて養はす。美しきこと限なし。いとをさなければ籠に入れて養ふ。竹取の翁、この子を見つけて後に竹とるに、節をへだててよごとに金ある竹を見つくる事かさなりぬ。かくて翁やうやう豊かになりゆく。

ここでは会話文を無視し、地の文の文尾のみに着目する。すると過去形→過去形→過去形→過去形→過去形→過去形→過去形→過去形→**現在形→現在形→現在形**→過去形→**現在形**と、現代日本語と同じように、現在形と過去形の混在が認められる。本稿は、日本語研究が主ではないのでこれ以上の追究はしないが、現在形と過去形の混在は、日本語の最古の物語文にも見られるものであり、日本語の本質的なものであると考えることができる。日本語の世界観、日本語の本質は、1000年以上の時を経ても本質的に変わっていないようだ。

6．日本語に対して肯定的な姿勢を持つことの意味

前節までで、英語のhistoric presentと日本語の現在・過去形の混在についての考察は終わった。しかし、まだその現象を外国人（留学生）に「いかに伝えるか」という課題が残っている。本節では、教師が、日本語・日本文化の特性を外国人に伝える際の姿勢について考えてみたい。

鈴木孝夫は『日本語と外国語』の中で、漢字の二重読み（音訓読み）の利点を唱えた。そして「日本語の利点の理解を」いう小見出しをつけ、外国人に日本語を教えるときの注意を述べている。

> 日本語の国外普及はようやく始まったばかりであるが、このように外国語とは一見異なるが、それなりの合理性と利点をもつ日本語のしくみについて、日本人自身が正しい理解を持ち、日本語に対して肯定的な見方を身につけていないと、外国の人々の日本語学習に対する態度は、当然のことながら消極的なものになってしまう。
>
> ここで取り上げた音訓の問題にしても、従来のように日本の知識人が、それをただ煩雑な悪しき因習のように思い込み、出来ることならこのような二重読みをやめることこそ日本語の近代化につながるのだが、といったようなことを言えば、外国人の漢字習得の意欲は、目に見えて減退してしまうのである。（中略）
>
> …利点を外国人に説得的に教えられるような教養が、今後の日本語教師に求められるのである。（p.148-9）

筆者は、鈴木のこの姿勢に強く共感する。日本語・日本文化に対する「夜郎自大」の姿勢は外国人からは煙たがられることを小倉（2007）で述べたが、それと同様に控えるべきなのは、日本語・日本文化に対する極端な自虐的な態度である。言語を含め自国文化に対する極端な賛美は、自国主義として外国人学習者の嘲笑を生むだろう。しかし、極端に自虐的な傾向も日本語学習者を遠ざけることになるだろう。日本語・日本文化と他言語・他国文化を相対的に見て比較できる教養をもち、前者の利点を外国の日本語学習者に教えられる肯定的な態度が、外国人留学生に接する教員に求められるのではないだろうか。

筆者がこのような考えに至ったのは、本稿の冒頭で書いたように、いつのまにか日本語に対する否定的な見方が染み付いてしまった自分に愕然とした経験が出発点である。筆者の自省の念をこめて付記しておきたい。

7．結語―本稿の提案

前節で取り上げた、外国人留学生を教える教師としての「姿勢」も踏まえて、筆者は、留学生に日本語の物語文における「タ」形、「ル」形の混在を次のように説明することを提案したい。（主要な変更点は、後半部分）

「文尾のタ形、ル形は、書き手の立場から言うと、文章の調子が単調にならないようにする工夫なんだ。現代日本語の欠点を挙げるとすれば、特に物語文で語尾が単調になるということが挙げられる。物語はほとんど過去時制で話が進むが、だからといって、「タ」形ばかり使っ

ていては面白くないだろう。だから書き手は、適度に「タ」形と「ル」形を混在させて、文章にメリハリをもたせるんだ。」

「この混在は、現在と過去が一体化した、日本語の本質的な世界観から生じていると考える研究者がいる。僕もほぼ同意見だ。「タ」形、「ル」形の混在は、英語のhistoric presentと似て叙述を生き生きとさせる効果があるが、historic presentは小説中の一種の技法として使われる例外的な用法なのに対して、日本語の「タ」形と「ル」形の混在は、より本質的な用法なんだ。だから、この現象は物語文だけでなく日本語全般にごく普通に見られる。一方、英語は、日本語と違い、過去から未来へ直線的に進む世界を表す。そう考えれば、英語の時制は強固だけれど、日本語の時制概念は弱いように見える理由もわかる。このような両言語がもつ世界観の違いから、英語の物語では語り手の視点は通常動かないが、日本語の物語では恣意的な「タ」形と「ル」形の混在によって、語り手の視点が動く。語り手が登場人物とも一体化して、英語にはない臨場感を醸し出すこともできる。これは日本語の利点といえるかもしれない。」

注

本稿では、「語り手」と「作者」を同一のものとして扱っている。文学研究では、語り手と作者を別のものとして扱うのが普通であるが、本論はその立場は採らない。

参考文献

芥川龍之介（2002）『羅生門・鼻・芋粥・偸盗 改訂版』岩波書店

安藤貞雄（1986）『英語の論理・日本語の論理』大修館書店

安西徹雄（2000）『英語の発想』筑摩書房

Biber, Douglas（ed.）（1999). *Longman Grammar of Spoken and Written English,* :Longman

Cockerill, Hiroko（2006). *Styles and Narratives in Translations: The Contribution of Futabatei Shimei,* Manchester and New York: St. Jerome Publishing

Dickens, Charles（2005). *David Copperfield*, revised ed., London and New York: Penguin

江川泰一郎（1991）『英文法解説 改訂3版』金子書房

E.G.サイデンステッカー・安西徹雄（1983）『日本文の翻訳』大修館書店

E.G.サイデンステッカー・那須聖（1962）『日本語らしい表現から英語らしい表現へ』培風館

樋口万里子（2001）「日本語時制表現と事態認知視点」『九州工業大学情報工学部紀要 人間科学篇』vol.14

平田由美（1990）「虚構の時間と時制の形式」『人文學報』京都大学人文科学研究所

板坂元（1971）『日本人の論理構造』講談社

Jespersen, Otto（1965). *Essentials of English Grammar*, Tuscaloosa and London: University of Alabama Press

金田一春彦（1988）『日本語新版（下）』岩波書店

三上章（1999）『現代語法序説』くろしお出版

三島由紀夫（1973）『文章読本』中央公論新社

小倉慶郎（2007）「「神様」の英訳から見た、現代日本人の宗教観―「共通基盤」から日本事象を説明する試み―」『大阪外国語大学日本語日本文化教育センター 授業研究』第5号

北原保雄編（1989）『日本語文法・文体（上）』講座日本語と日本語教育 4（明治書院）

Rubin, Jay（trans.）（2006）. R Akutagawa, *Rashomon and Seventeen Other Stories*, London and New York :Penguin

阪倉篤義・大津有一・阿部俊子・築島裕・今井源衛校注（1957）『竹取物語・伊勢物語・大和物語』（日本古典文学大系第 9 ）岩波書店

宗宮喜代子（2007）「英語と日本語の「時制・相」について」『東京外国語大学論集』第73号

鈴木孝夫（1990）『日本語と外国語』岩波書店

谷崎潤一郎（1975）『文章読本』中央公論新社

山岡實（2001）『語りの記号論増補版』松柏社

柳父章（2004）『近代日本語の思想』法政大学出版局

（おぐら　よしろう　大阪府立大学准教授、本センター非常勤講師）